

◆ 裏山のある住宅建築

松村 泰徳



外部1:西面道路から望む



内部1:リビング・ダイニング



内部2:畳室(客間)

今回は、筆者が設計監理をし、今春完成した住宅建築（以下「城町の家」）を紹介したいと思います。およそ40年前に開発された閑静なニュータウンで、敷地は西に接道し東には森が広がるロケーション。南隣地は約1m高く日照が不利なため日影図（計画地に実際に落ちる日影を時間帯ごとに計算して作図したもの）を作り、建物の配置及び開口の位置を注意深く検討しました。

建築主の要望は、和瓦葺きの深い軒(のき)の出をもち、収納を除き建具はすべて引き戸の家。それ以外は所要室を満たせば、あとはお任せしますとのことでした。それに応えるべく玄関平入りの軒の出は約1.2mとし、杉105角の大垂木と杉の化粧野地が屋根を支えるダイナミックな架構としました。もちろん開き戸は一切ありません。深い軒は夏の日差しを遮るだけでなく、外壁を風雨から守るため建物の耐用年数も延(のば)します。また、「引き戸」は「開き戸」と異なり、開いていても閉じていても安定した「静」状態であり、使い勝手と意匠性を両立しています。建築主は二度目の家づくりということもあり、家の必須条件をよく心得ておられました。

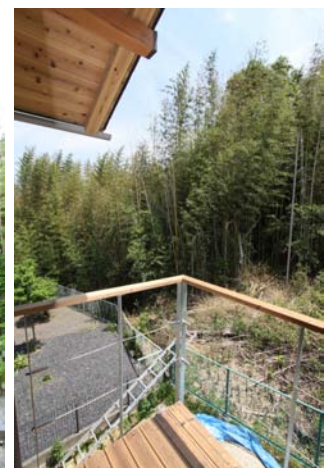
一階内部では、来客を重視するために応接の「畳の間」は独立させ、西庭に面した濡れ縁をもたせました。一方、東面の森を見通せる「キッチン・ダイニング・リビング」は一室空間とし、セミプライベートゾーンと位置付けました。二階プライベートゾーンは、前室をもつ主寝室と、可動間仕切りを組んだ3つの子供室（1室や2室にすることが可能）で構成させています。（設計時は、お子さん2人でしたが完成時には3人目が誕生し、満員御礼となりました！）

外部においては裏山が広がる好ロケーションのため、コテージを想わせる深みある外壁色とし切妻屋根を掛け、二階の南面開口部にはアクセントの要素も兼ねた物干し手すり、裏山面に跳ね出しバルコニーを設け、一階では素焼レンガ敷きのテラスとしリゾート気分を感じられる意匠としました。

以前「龍田の家」で実践した、暮らしの変化に追随する“可変的性能”を、違ったアプローチで「城町の家」でも実装させ“建築の長寿命化”が図(はか)れたと考えています。



外部2:手前に南庭、奥に裏山が広がる



外部3:跳ね出しのバルコニーの向こうには裏山が広がる。

◆ 慈愛の侠客 — 司馬遼太郎作品「俄（にわか）」 に学ぶ② — 辻 祐司

下の写真は大阪中之島公会堂の東、東洋陶磁美術館の前にある豊臣政権時の忠臣木村重成を讃える石碑です。明治29年に豊国神社内に建てられたものでしたが、豊国神社が大阪城公園に移転した為この石碑のみが残ってしまいました。大きくて見事な石ですがこれは《残念石》と呼ばれるもので、大阪城築城の折に各地から石垣用の材料が運び込まれる途中の運搬ミスにより川底に沈み、石垣には使って貰えなかった石です。隣の写真はその発起人が記されている部分です。大阪府知事第二代西村捨三と小林佐兵衛と記してあります。この小林佐兵衛こそが今回の主人公です。

江戸時代末期の大阪に明石屋万吉と云うヤクザの大親分が実在しました。ヤクザなのに喧嘩はダメ、博打も弱い。そんな万吉が、何故大親分たりえたか？ それは、たぐい稀なる慈愛精神の持ち主であったからだろうと思います。

11才にて、母・妹を食わせる為、極道の道へ進みます。（元は商家にて丁稚奉公をしていましたが父が蒸発）初めにやった事は、《賭場荒し》。当時、カッパ賭博なるものが少年たちの間で行われていました。万吉の行動はその賭け金の上に覆いかぶさり、殴られても蹴られても身動きせず、流血と痛みにも耐えて皆が呆れて諦めるまで続けることであった。こうして得た金を母のもとに届けるのであるが、金銭の出所について目明しに疑われ拷問を受ける事になる。やがてこの拷問にも耐え抜き釈放される。また、15才の時、大阪の米商人から依頼を受け堂島の米相場を打破る。（当時、江戸の御用商人が高級官僚と組んで堂島の米取引価格を操作し巨利をむさぼっていた。その為、大阪の米商人や庶民は困り果てていた。）この時も拷問に耐え抜き最後まで依頼主の名を明かさなかった。その為に万吉は年2000石と云う報酬を得る事になる。当時2000石の米といえば大身の旗本に匹敵する収入であった。そんな収入を得た万吉であるが、その米を他人にタダで呉れてやる。困っている者や食えない者がいると自宅に招いて食わせてやる。そんなだから万吉の家には食えない者がどんどんやって来る。世話になった者は勝手に万吉の子分と名乗り出し大阪中に《自称 万吉の子分》が増える。それを万吉はとがめる事もしない。また幕末動乱期には幕府方弱小藩の懇願で、西大阪の警備を担当する事になるがその必要費用は全て万吉持ちであった。（代りに武士の身分とされその後は小林佐兵衛と名乗った。）そして維新後には今度は大阪府知事から懇願され、大阪市消防組総頭取に就任し新組織を創設するが、この時も必要な費用は全て万吉（小林佐兵衛）の私費なのである。当時の万吉は相場の知識を得て米相場で儲けていたのだが、どこまで、「人がエエねん」と思えて来る。その後の万吉は火事で焼け出された者を自宅に収容し保護するようになり、また孤児や病人も引き受けるようになる。明治18年にはそれが「私設・小林授産場」となり大正元年の大阪市財団法人「弘済会」へ引き継がれるまで続く事になる。小林授産場は当初から万吉の私財で運営され、大阪市より橋梁清掃や便所清掃を請負っていたものの弘済会引継ぎ時には、相当の負債があったようです。そして、大正6年には明石屋万吉こと小林佐兵衛は88才で没することになります。

ある意味《馬鹿か？》と思える程の人生ですが、明石屋万吉こそ本物のヒーロー・侠気の徒であったと思います。これほど私財を投げだして他人を救った人は歴史上にもそういないように思います。なんてカッコイイんでしょう！大阪にそんな人がいた事を、嬉しく思います。



旧豊国神社内石碑

建立発起人

◆ 編集後記

松村さんが設計した今回記事にある住宅は、私も見学会にお邪魔したのですが、木の葉の音とともにやってくる裏山からの風が印象的でした。

辻さんの記事で紹介されている、「万吉」さんの話は昨今勢いの薄れた大阪の街のことを想うと元気付けられます。

今年もあとわずかとなってきました。皆様にとって来年がよい1年でありますように。（橋爪 恒平）

「アーキテクトキャラバン」は、建築に携わる有志が集まり、その活動内容や住まいに関する情報などを、広く皆様へお届けできる場として、年4回季刊誌形式にて発行しております。新築・リフォームに限らず住い全般のご相談等御座いましたら、ご遠慮なく右記事務局までご連絡頂きます様宜しくお願い致します。

◆ 編集メンバー

井戸田 精一	井戸田精一アトリエ
辻 祐司	辻 建築設計室
橋爪 恒平	atelier nest -アトリエネスト-
松村 泰徳	松村泰徳建築事務所

編集・発行 [アーキテクトキャラバン]

大阪事務局／天満スタジオ
大阪市北区天満4丁目11-8
工技研ビル2F
TEL : 06-7501-4517
FAX : 06-7503-4773

奈良事務局／松村泰徳建築事務所
奈良県葛城市北花内261-5
松村ビル 2 F - W E S T
TEL : 0745-69-5938
FAX : 0745-60-6524
E-mail: contact@ym-arc.jp
URL : http://www.ym-arc.jp

Copy right 2010-2012 Architect Caravan All rights reserved